

臓器移植からみる医療従事者の死生観

－ 生と死の間 －

立命館大学大学院

応用人間科学研究科

臨床心理学領域

上杉 優香

この論文の目的は、日本の医療現場での命の扱われ方について、臓器移植の問題を通して医療従事者側の視点から見ていくことである。医療従事者に焦点を当てる理由は、生と死の狭間で仕事をしているからである。一般人も三人称的な死には毎日出会っているが、空間を共にしての死の体験は少ないのではないだろうか。生死を医療という行為の下に、人為的に操作することが可能な渦中にいる人間の視点から生命の在り方について考察していく。

2010年に改正臓器移植法が施行され、1997年成立時より脳死による臓器移植が推進され始めた。先端医療が医療として成功を成して来た背景には、当たり前ではあるが多くの人間の死が横たわっている。特に脳死からの移植問題はその死が曖昧になりつつある。生と死の間を分けるラインはどこにあるのか。そもそも線引きは可能なのかという問題である。

今回の研究では、医療従事者に脳死や生と死の問題についてインタビューをし、語られた材料をナラティブアプローチにより分析した。その結果、医療従事者でさえ、脳死が本当に人の死であると断定することには躊躇したくなる現実があることが明らかになった。ただ、現場では業務としての医療が日々進んでいくため、人の命を救う行為と生と死の間の矛盾という二つの答えの出ない問いの中で葛藤を持つことになる。日常の医療業務の中では表面化されないこの矛盾を前提にしなければ、脳死や移植問題についての議論は進んでいかない。

脳死からの移植問題は、これらの知識に関する教育と現場の状態を知ることにより、それを知らない人とは異なる視点が生じてくる。文明の発展は享受と共に生と死の間という解決できない微妙な側面を生み出した。進む先端医療に人間はどう対応していけるのかを考えていくには、人間の実存について問うていく必要がある。